式子内親王御集

ハ 4
1409

山科家
図書

山科家
門跡
1409
巻

前齋院御集　式子内親王

西行歌大概抄云　萱斎院唯一人　号金宮

百首

春二十首

式子内親王
後白河院
号斎宮院
式子内親王

春もまつ花ちるかぜのなごりにて吉野山峯の宮ゐいつる月かな

うぐひすはなきてさそふと思ふまでかすみのおくに春ぞ経にける

いにしへはむかしの月の夕月夜たれのひかりぞ花の初しも

ゆくさきの春あり行方をたづねぬるかな花のこしはいつくなるらん

見わたせばこの世ばかりもあらぬかなまこもかりそめ春の夜の夢

あはれたれ春をもかすめる世をうらやまずおくの山ぢは

雲ゐかしかりふるとしの年ごとに見そめしかたをむかしとぞ思ふ

きえやらぬ雪のしたにはつるはあれどうつもれぬるかたをしぞ思ふ

たかやのうめはあるかに匂ひて藪うぐひす香をさそふ人の神垣

梅農とふ意きことの色ろ花をとてはひのかの衣かり

けふ鶯をいさ花ぬしとなる鶯の見渡せば霞ぬかをる春の曙

新古今春

くるなとてとらすとてかそふ袖ハ花のもとのおふ春の雨

玉葉春

花ちるとあやまちこそ思ふかくさそふ花ぬしなるとて

なほ毎のうぐひす山の雪つとさそふ花をたづねて

むかし尾上をたづねて春かすみたちさのいはのさかりこそ

たちふかぬやはの色の引端をとめんはつむやきれかをる

のいとすぐ百敷の月はなるかの袖ぬ

春ぬ物うぐひす春ぬ行ひとよ袖ぬ

ぬるとて人今はやむふるとかとて雲ひあをはの色

すふけるかをとんのいろをとかるは春日のやまの宮

夏十五首

春のいはひとうきこゑもぬ花をたてて苦ふをたるぬ神ぬ家をさ

ほとゝぎすいまこそひとる雲ぬ春ぬ雲ぬ卯花

新古今夏

ひとぬやあふひを葉ぬ川ぬ野をぬ家のぬ

春をやとふ花をとふとて春ぬ社ぬ花ぬ一夜

あやめをふ花をとふはふ動をおつををぬ神ぬ

ふをぬ春をあやめてけふ春ぬ端をあやめ

たきぬ水鶯のおもを文ふすう月のこゑ新苔ぬ

なるぬ八月ぬ庭の打ふをつぬるぬすて

ぬるをとて志ぬ春ぬ八をぬ毎をぬかをる立花

夏の夜をやすらかにふく三日月のてるほどもなくかたぶく山の端

なごりなき空にこがらしふきぬれば月のかげとぞ

みやこの夜の海とりの吳竹うらなびきぬれ秋

松蔭の岩間をくぐる水の音ふきとおしかくるふるの雪

高き月はさやかに夏の空なれども時雨をぬきて見る松のこずえを

里ことにさかり板井のこがらしに梢ふかくもくれぬる

秋二十首

ちりぬれてふるの杉をとはぬ山かせのたよりにいろかとぞ

新古今秋

紅葉ばをたきぬ嵐の音ばかりなびきぬ言

新古今秋

頼みてもたのみしかの夕べのゆふ秋

大うちは秋のなかばの袖の雪かくるる秋さぶる人はとぞ

吹むすぶ露もすでにあさかれぬ夕風

袖のうへにはあのやうなる秋なれば

あさぼらけ山の端ぬけて秋ぞ

おもかげ立ちぬ秋の夜の月

袖にはあまるまでなる秋の夕べ

玉葉秋

たびの袖をはらはぬ秋の夕べ

秋ふかみ人の袖をこぼれぬ

月はもむ東のいろをそめ

おしなべて秋の色にぞ

玉葉秋

いつくしぶ井の原の色あらむ月の八月にたちぬ

新古今秋

宵のうちはてるとはなき月なれば山の端ちかくなりぬ

秋の夜の雲なき空も月をくもらせてふきしはすてにぬるかはなる

しきの戸ハさしてありひぬるよへたつる月の影よまりおそて

新古今秋

松はれふかくむかしの舟あかしの月影に志ろきをみる秋の巻

御歌大概抄云 秋風よりまり

はな庭すのはつそのかすみたるおもてかなしとや窓ふかるらん

そて行ぬ秋とやおくらむ涙をは庭の木の葉の一葉へ散く

御歌大概抄云 秋風は昔にいまも…

冬十五首

神無月あらしそ軒をさそひつゝ国まて志ぐるゝ木の葉ぞなき

いかなせまくふかくのをはいむすそまさにふなさきの一葉

桂の庭しはしは時雨たすきて紅葉のちてさめゆやのぬめ木の葉ちる

玉葉冬

さひし何も庭とのかをるひてを木葉し霜の人そつゝ涙の流る

冬の雨ハ谷の小川の音たえて峯のあらしは空にとかへる

みほとりの岸にみえたる舟の翅すみたちぬるてをハ月やとしをや

冬の池の汀（汀イ）にうかふ鴨のむらとひろあへぬ霜さえてきも

末紫つむ宇治の川舟かひぬさえの志ろきやかつ氷ゆ

いはくのを絶えてもはしはれ冬の夜ふかき松風の音

ゆふれつるひまにしらむ霰ふるのさへ渡り川たちふかき嶋え

さるかたに小雪の老ハおるかのをみて有明のつきそふ

あくかたにしふ小ふかき雪ハぬあられぬ影も暗涙おとつれ

松葉よよ雲枯れかくふる清き冬の宮こる中の小野の山里

まみそす袖て消ぬる霰仰けて葉のかすみの宮のハ沢よ

年波のかさなる涙ともおとろくにはすふくそてる事ハ秋ふみ

恋十五首

見ぬ恋さへみちぬるぞなき袖人しれずてつゆの玉とも
はかなき夢をかきくれてひるさへ下葉に陰まよはれ
新後撰 恋
夏山に茂るかげにつれて露れあるとはしらでなげきやる
しらざりきや葛城山にゐる雲のたちゐにつけて我こゝろ
たのむかなみそぎにもひとへおもひ袖の露はおもふ宵かな
あはれとも いはれぬやとなをひてはそれの心ゆくて世をたゆる
つれなきをうらみぬよの月のまの名残さて夜は更るべき旅の枕
続拾遺 恋
はるのまの夢もまつよはゝしぼる袖にはまた涙にぬれぬる
しらぬ身をせめておもひしぞおもひの袖はたゞつねにおもひ遺るまに
むかしの関越ての又も成る身の旅を宿のあはれとも
よるの浪もたゞよふ浜の松風裏打ちあふ枕で寝られぬ
いかにせん夢路にだにもゆきやらずむなしき床のよはの枕の風
おもひてよしみに世をもあるはいひしゝはれる人まちて葉
はかなくも思ひあまりてわすれぬ月日のはかなき恋のうさぬれん
新後撰 恋
思ひくて我がひとになひく煙あるくいひしちぎりの果ぞうき身よ
雑 十五首
昔むしろいく夜かさねて秋をたのむ庭のうへの松の露
はるかなる木の葉のまよふ雲にたつ浦の松の風
志かの浦の草のいほりの板戸のまよふ人あはれに野べの秋
あまの袖にはしほたれつゝおもふ雲のまよふ風の音
ゆふぐれに雲の行きて我がむかしに似たる旅の宿とはる
はるかなる袖もしほれぬ浪のよるの夢もまさる四の緒の聲

山ふかくすみて閑かなしまゝの戸にさしくる夜の月やさらてと年て
玉葉雑
こゝろからひとりたのしむなれはてあはれにみえける我身ハ　をイ
すてはてし後も歎くと思ふ世の見えぬまなこにさはる袖のしら露
なにを待あしむかし残りにし夜每はかへる思ひ涙そゝきくら
さまよひまて老はすてにけりあはれわかき日にかはと思ふこと
みしをと每ひぬ行末をかなしむあはれまたかりさまに涙ぞの雨
浮雲乃かゝる高さ大空のはれてしまぬくて光かゝるき
はかなき夏をかめても見ゆて世を持ちはあはれとてかぬ空
君か代にみをまかするや山賤の世のさかり是ゝひとしれゆれは

百首

春二十首

年たちかへるとものおさまれる春の色むかしきよきにまつ志るき哉
雲井より立ちいづる哉霞は八重にはるかさなる谷の下陰　云イ
ゆきゝえて春残をたかしおく山乃松そしるくそさえかれ
かすてしけ今朝の雪ふるにかすかの野のたちさるものの若菜摘て
つみかくせは消しことふかくのをちて八重さく藤浪の春すみなれむ
若竹のあれほとに松の春にたつしてまつともしける庭の梅か香
すめかへての花やはよそにをかぬきかぬ梅のこれ春乃夕闇　拝イ
匂ひそは夜ふでにいてはてありとも春のよしれむ吹かせ農いろ
深き林つる花の盛りかするかすみ人の間よそに匂ふ志たる家
いせの海はなれぬ春の朝のまよたれをかへ月夜のたもとの花
深くともあられのほとりゆきやる山は寂しく鳴くなるものたえ残れる羽音

今朝みれ河ふ花のしもや乗やいかならむ春雨かゝる夕暮の空

わか中ふ山乃紙乃岑のたかなみせしいま浪とおちてくるらし

鳥の羽音かならむてつれなきて谷の雪かゝる春乃あさ衣の

み山ゆく人の袖とも思ぬ時ならすつもゆかいかとる春雨

尋みよ吉野のたかき乃山おろしの風のおとこなれかの庭乃かすみ

たえまに見乃まなかおほきて松のかけみかはれる乃嶺の梅乃花

玉葉春
暮て行たかき月をたかな春雨の梢乃くもりておほろ月

かさなりて八重の山ふきにほひさえてかすかなる日をすみ

時にかゝりてあふれそらにさえていかなるよむ山の中

夏十五首

玉葉夏
さ津きもまたほとゝきす夜の花はぬるえの木のあやめをもみたれぬ

おとゝきも思ひ初やけふこそは卯月のきのかれなりけれ

まつ乃との垣根の中さそ卯花ふ中もおとろえ波なるゝ

ゆらく雨ゆきうつらはしてたつひとつ思乃あけ木の空

さみしく夜ほとゝぎすたちぬ雨まつ庭まちさす一声そふ

新後撰夏
むらしおなかさあやはなにたゝみてものやくらぬ時鳥

まにうつ中水のさみたれぬ八たる中ちらは峰の梢まよる

ともあき乃さと乃卯なるゝたち花にほゝなみのめく月夜の宵

なをかえ橘かちの雲井もまよいかゆく方もしらぬさみたれの空

やすかつれの雨なる河るゆふ木もおもひの夜のほとゝぎすや

い猶く乃露をはらさの常夏にあきさてなかぬるむしさあの水

あふはの関乃ち見むろすきかてふあつき雨てむすふ山の井の水

あくかれて夏はかりそ山陰の志ミつや秋のちかくなる庭ん
新古今夏
まちかねの野嶋の萩ふともまた袖ハぬれぬ秋のいたいとふ
夕ぐれはなかの下風袖にさてまつのおとなふにさのの声

秋二十首 一首多之

明ぬるや葉さ秋やおもふ秋にすむ心のいはのまつの月あらん
庭の苔軒の志のふまて萌る秋とあれのやまとふる露にわくる尾花
あさ風は花野の山ふとて露ふ結ひ毎々かたる萩
草隠れ我なく中る霧のとてたえくみる宵のいつは涌
あきちきさとの志かそふかきさと寂しき衣のかさ
むしの音も籬の廉もひとつにあはれなるさみ秋の夕暮
露深むさかくれは小野ふちる袖はまる嵐すさの萩原

なかむれは寒の秋ぬ袖のちかき秋のさか葉のゆふくれの
浅茅生のさ夜ふけゆけと松風にさはかぬ秋の夕風
秋の夜の志つかにふかき窓の雨うちなきて風くらはしむらん
鶉なく野辺の志の風の寝覚かへむしの音袖ふくる
むらさめの宿まも秋の光つはなく月かさそふまさくのかハ
秋の夜の嬉しくも我むらの上露月もまさとみるなすかな
月の秋ハあらしの嵐袖かさまて冬になるかるのかハ
ひさかたの月そおもへは月に雲清くあかむる月のみつの影志の雪
續拾遺秋
あかなくにはるか志る露き人果もなき秋に雁かなしき月の影
やまの袖くらし残かいとまて月と秋とて寂しきくるかな
玉葉雑
今はとてかはらぬての色んいふつ毎我をは枕れ山の端の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬十首

神無月かぜふきまさるもみぢ葉の
ふるの山べの木ぬれ[illegible]
いそのかみ[illegible]

[illegible]

[illegible]

たのしたの[illegible]

玉葉冬

[illegible]

[illegible]

新勅撰冬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霜おきて[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恋十首

[illegible]

玉葉恋

[illegible]

あきれかゝはさまにふ小沼やうらかなしおもふ波のせめてもくす哉
思ひのみあまれは小野にせるをはらしきてれくちゆく袖もみせはや
かはるにたりゆくむすつゆのひとよの夏野乃草にしるきこそ
うらこえしあふよのへしよしなくて会てたえぬなほやとて南
恋しきぬふかきみのたとの夕暮乃やまはつるたもとへは泉
あさ海や浅香ぬまのたえぬるかわすれてそ舟袖をぬれつ
我袖のぬれるうはたちみしに末摘はいそ海にせむ
いつしかの雲井をとくるけわさうれ志のふ乃山に岩のかゝち
ことはきぬ恋を蒼みもつかさてはれ目にしゆる袖の洞に
常盤木のちぎりや海ふたつを姫志らぬ声をふきたゝ吹く縁
ふかさはなほし河にみつきせむ

たゝ人の君にたへの空哉見あみおもしれ志へれや袖ふりつつく
来れかはかり袖乃あきに荻風あまの縁にとぬなるひとおもえん

雑二十首

恨ひのたゝにふりぬ空の中ふなる絃はあゝれせよ秋なれ
いそのすゝふかき舟海草乃露にむすひの山にはるる月影
作志もとよのゆれしにむすひきそんくゝゑ涼さよの中山
ゆきの海あるふかゝや猿こともり白雲のもみちの陰や恨人乃中を
ならむき我あわしの絆も彼にあもふとひの雲のなかの時の月
河舟のうきてとゆく彼のとふあつ海のとまそ志よれあまぬあか報
あはとゑむるゝれやすと作りてしそていくその舟にのをえたまん
うきふきゆきなのふにかゝぬ世の中をおもへは袖もいろかはりゆく

[illegible]

世中にはもひのこすことはなしあるやうにてもかつ毎年の月日は
あらそはれぬ[illegible]ひとしたの[illegible]
[illegible]

きはひつてはさきはかりかそへてもなほ年の[illegible]
年ぬまをはつかの[illegible]
[illegible]

建久五年六月二日　私百首を四治二年法百首歌

百首

春二十首

[illegible]

新古今春百首　[illegible]

[illegible]

新勅撰雜歌　[illegible]

同春百首　[illegible]

[illegible]

新後拾遺春

[illegible]

新古今春百首　[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

新勅撰春百首　[illegible]

[illegible]

玉葉春 正治二年百首の内

[illegible]

新勅撰春 百首の内

[illegible]

續古今春 [illegible]

[illegible]

風雅春 正治二年院百首の内

[illegible]

續後撰春 正治百首[illegible]

[illegible]

新古今春 百首[illegible]の中ふ

[illegible]

[illegible]

夏十五首

風雅夏 正治百首の中より

[illegible]

[illegible]

新古今秋 百首[illegible]

[illegible]

續古今秋 正治百首[illegible]に

[illegible]

風雅秋 正治百首の内に

[illegible]

新古今秋 百首[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

風雅秋 正治二年百首[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

新古今秋 百首[illegible]時

[illegible]

續後拾遺雜秋 [illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今秋 百首[illegible]時秋の内

[illegible]

続拾遺秋正治百そうこに

おりゐとあさひてるれあきのそらのふるさとの紅葉

冬十首

新千載冬正治百そうこの中に

かくるゆきをみむろの山のやまおろしに風さゆるみわの山川

新古今冬百そうこの中に

みるゆきをいまはあるとも鴨の羽の新しかるべきあけぼの

風雅冬正治百そうこの中に

さゆる夜の月のあかしに四方のうちはてあれ風さはぐ庭の木の葉

続古今冬百そうこの中に

あれてふる人のやどかさゆるとみそれなくこゑふる風さはぐ庭

同旅正治百そうこの中に

菖蒲鴨のうきねのうへにあけてかるこゑ波ふく江

新古今冬百そうこに

なのりそのあまの藻塩の煙にふる波をゆめにふる波

風雅冬正治百そうこの中に

さむしろ衣ぬぎ敷きまくらにて初雪ふる夜の月のまつ

風雅冬正治百そうこの中に

むれて立ちゆきけふさえ風くれの雪やふるらん鶴の

玉葉夏正治二年百そうこの中に

ほとゝぎすなくこゑ聞くなかぞらにてやすらふ月の有明

風雅夏正治二年百そうこの中に

ほとゝぎすなくこゑ聞くなかぞらにてやすらふ月の有明

新古今夏百そうこの中に

ほとゝぎすなくこゑ聞くなかぞらにてやすらふ月の有明

新後拾遺夏正治百そうこの中に

ほとゝぎすなくこゑ聞くなかぞらにてやすらふ月の有明

ちはやぶるかみのいさめのしるしにてあしたの雨はあらしなりけり

新古今夏百そうこの中に

いとゝしをけふはかりとぬぎすてゝ新しき衣

玉葉夏正治百そうこの中に

もとゝしやゆふ風のたちて長雨くもるゆふべの野をぬけさゆる

風雅夏正治百そうこの中に

まくらとてはるゝ夏風ふきぬけて長雨くもるゆふべの野

玉葉夏正治百そうこの中に

ちはやぶるかみのいさめのしるしにてあしたの雨はあらしなりけり

池さむしなにをかはらぬ夏ふかみ雨ふりそゝぐ夜ゆふ

玉葉 夏
月かけも秋ちかしとやさよふけてゆくさきの萩乃ねところかはらぬ

風雅 夏 正治百首の中に
杜かけやまたふりまやくらふころの雲ちるさきゆて行あさるらん

秋二十首

新古今 秋 百首歌奉りしに
すてゝ秋の野守の袖にうつるなかなかに庭乃秋のはつかせ（床イ）

風雅 秋 正治百首の中に
なかむれは袖にうつらふ夕月にすゝしきこゝろかはの秋乃そら

ひくらしのこゑもたえぬる山陰にゆふくれおとろかす入あひの鐘（よイ）

新古今 秋 百首歌奉りし時
あともなき庭乃浅茅にむすほほれ露のそこなる松虫の聲

わかのうらのいなはのかせにねをよふかのあかつきにふくたつ庵の聲（かとのイ）

よせかへるなみのあたりは秋つてしらくもかゝるまてにほふ浦萩（るイ）

續後撰 秋 秋のこゝろ乃中に
白露はいろもかはらぬをおくらしも萩の下葉そ秋をしるらん

新勅撰 秋 百首歌の中に
あさちふや袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢をふくあらしかな（そイ）

身にしむは庭火のかけにさえのほる霜夜の星の明かたの空

新勅撰 雑 百首歌の中に
天津かせこほりをわたる冬の夜の乙女の袖をみかく月かけ

新古今 冬 百首歌奉りしに
ゑのまてふるゆきさむきゆふさふもみの煙もたえひしおほはらの里

わかれゆくやとしの名残のあかつきめぬるこそはれくあめのつらゝを

續後撰 冬 歳暮のこゝろを
ひとゝせははかなきゆめのゆきの中をもはるになつかしちるさまを

をのつからかくれてはやくきえのこるをもむかしのなこりとおもふを

恋十首

新古今 恋 題しらす
志るへせよあとなき波にこく船のゆくへもしらぬ八重の潮風

いくたひかはけしき沼のみをたちて志る人なかにくつるゝ袖（そそイ）

新古今 恋 百首歌の中に
蘆ふゆゑあるみか人の瀬なきつきつぬる宵の袖のなかれて

同
とゝかいひは志らぬ人をもうらみせて床のなみたそよるにかなしき末枕

[illegible]

新勅撰戀百そくそくの中に
[illegible]

[illegible]

新拾遺戀百そくそくの中に
[illegible]

新古今戀
[illegible]

續後拾遺戀百そくそくの中に
[illegible]

旅歌

續後拾遺旅[illegible]
[illegible]

新勅撰旅
[illegible]

續後撰旅のこころを
[illegible]

新古今離別百そくそくの時
[illegible]

同

[illegible]

山家歌

風雅雜のうちに中に
[illegible]

新古今雜百そくそくの中に山家のこころを
[illegible]

風雅秋四位百首中に
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

島歌

新古今雜百そくそくに
[illegible]

新續古今雜四位百そくの中に
[illegible]

[illegible]

新千載雜歌に

たゝ[illegible]やかなりに[illegible]ふ波のよに入のうきをしまても世をすて

風雅秋 西法百首の中に

[illegible]ひをの深草[illegible]かゝる[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

祝

[illegible]

新古今賀 百首[illegible]

[illegible]

[illegible]

新續古今賀 西法二首百首[illegible]の中に

[illegible]

雜入勅撰不見家集歌

[illegible]

千載春

[illegible]

かゝ[illegible]のいはきはたゝ[illegible]

[illegible]

題[illegible]

同秋

[illegible]

百[illegible]

司賀

[illegible]

百[illegible]

同戀

[illegible]

百[illegible]

同同

神のいはせ給へる人の言葉なれば毎年をよぬるを祝ひて長月のま

賀茂のいはさかの社の社のもとに伏のうつ又

は日吉林寺の社にこそ

手ぶり所作につけて神楽(カミ)を

同雜

みやこ人や新しく立て志ある法師ぞ

百首歌の中に法文にまじへて書賢経乃唯此歌を相

拾遺集につること

同釋教

妙法蓮華経の第五の巻に八月の新宮の社を

百首なる中に神祇のうたに読めり

同神祇

ちはやぶる神もいさめぬ人ぞ成ぬかの人ぞ

家のやへ垣をこそ結ぬ

新古今春

八重咲ける梅の花の盛りなる時にあはぬ風ぞ吹かれ

かしの姫の歌

ちはやぶる神もいさめぬ人ぞ成ぬ

くるこそ

百首歌の中に

同夏

宮ちの社の杉の風の吉にはなを示すかれめ

たにかこそ

同同

郭公鳴ぬ夏の日のくれぬ日の夕

題しらず

同秋

蛍ぞ鳴ぬ夏の日のくれぬ日の月

摂政乃こそ

新 同同秋

ちはやふる神代もきかず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

百首うたの中より恋

同恋

恋しきを思ひ思ひて思ひ寝の
夢にしのびてかよひ来ぬらん

同同

思ひかねいもがすがたを
ぬばたまの夜の夢にぞ
見てなげきつる

同同

ぬばたまの夜の夢にぞ
見てなげきつる
我かゆくとの
ことにあらなくに

同同

百首うたの中より恋

同同

ちはやぶる神代もきかず
ものいふ花の
ことのはぞ世に
ふりにける

同同

いきてよもあひもまてじ人をつ
ゆのいのちをたのみ
そめてし

同雑

おもひきや
長月のあるはきのつゆ
秋ちかき
おほ海原の月

同同

かぶる

同同

有明のつれなくみえし
後白河院
百首うたの中より

同同

ちはやぶる神代もきかず
ものいふ花の
ことのはぞ世に
ふりにける

同同

いきてよもあひもまてじ人をつ
ゆのいのちをたのみ
そめてし

同雑

おもひきや
長月のあるはきのつゆ
秋ちかき
おほ海原の月

同同

かぶる

同同

有明のつれなくみえし
後白河院
百首うたの中より

同同

[illegible]

百首のうちに

同同

くもゐ毎日(たゝ)[illegible]世うけあるし[illegible]の末葉の雪にあるしるすり

玉葉歌の中より毎日晨鐘入法宝のこゝろを

同釋教

[illegible]

百首のうちに

新勅撰春

[illegible]

百首の中に

同秋

秋[illegible]

[illegible]

同冬

[illegible]

百首[illegible]中に大悲代受苦の心を

同釋教

[illegible]

玉葉歌の中に

同戀

[illegible]

後京極大炊殿ふたやうもそなへたる[illegible]

[illegible]

續後撰春

[illegible]

題しらず

同秋

[illegible]

恋のうた[illegible]中に

同戀

[illegible]

同同
いつにまさるなみだの袖にあまりてなほ
思ひあまりて
同同
きみをのみ思ひ出でつつ
忘れぬ
この中に
同同
思ひ出では袖にたまるなみだにぞ
月
同同
新うれてやどる月かな人をまつ
同同
少し袖にあまる思ひ
同同
村雨
歌ふたの
歌
同雜
あて
秋
秋のたのめ
続古今秋
村雨
正治二年百首
同戀
百首歌の中に
同同
題
同同
忘れ
同同
題
続拾遺春
吹

百首歌の中に

同賀

むさしぶ毒さきもかなら代の霜もけたれる菊の色さかり

阿弥陀経歌

新後撰釋教

霧の底ふかき法の花ぞ色にあらはれてあまねくてらす月の光

同同

まよひなき教の法を思ふ人ぞ心の月もくもらざりける

題しらず

玉葉秋

さ夜ふけぬ月ぞ明ぬる秋の夕神なびやまつたてる風の色なる

百首歌の中に

同旅

いとまもしみやこは空ふ毒ぬ末遠かりける人ぞ恋しき

正治百首歌よみし時

續千載春

花ぞ咲ぬ西新の西新なをはのそらも春ぞふりける白雲

たふとき

同雜

あ秋ふる雨みの里の浅茅ふる虫鳴なる秋の夕

百首歌の中に

續後拾遺冬

冬きてはいくしぐれ故柴の庵ふすまの紫ぞ秋ぞ

百首歌の中ふ

同雜

ひ人さ毒なる秋ぬるあて業ぞ戸をいなるおとひ冬のこがら

題しらず

新千載戀

恋ひ人やはすの芝果もひさうなる身も成ぬ

新拾遺夏

ふ秋乃ふはあそれもいと半まてもみよいふ法の天和撰

同雜

我庵の門きふこむる秋のそてさ物ふ寒よ志ひ(仕)をかふ

百首うた

新後拾遺雑

題しらず

同雑

おのがうき身にあはぬなるべしとてこそ

百首歌の中に

新続古今春

題しらず

同雑

六のひめみこ侍従集に一所ありしころ

えらびたるものなるもあるべし

ものせしにはあらずとなげくなるべし

侍従のあねいまこむとてものかきまぜ

あはせるまねをしてこの侍百首

をこそあつめ侍りしのはふるを勅撰にもよべし

侍りしとて

六のひめみこの侍従の後の世の人の

まなひふみまたのふたやく板にゑりて世に
ひろく行はるゝ本どもあれは猶ふかにいたりてかの
ことわさふにあひたる板らやをうせあれしを
ともに清書になりゆきさふ書るとおもひ書商
人鉄こころさしにて深くのそみひ板にゑらんと
まうふにおのれくはあやしくおもひふしくもとかく
ふにまかせてたまへるはかの紙さくらふまゝに古
鈔本ともこれかれとりあつめて京都や東川
此姫ここに京極黄門のまことにまうこしよみ
なりけむせまうもひとつきあはす練習清のひを
教のまちにうらけれやあれこれにまかせ
たまふまゝにおの弟子たちの手に書
商人鉄こふて清らかに板にゑらさするは
いかなるそ

文化九年正月

清水濱臣

文化九年壬申春三月刻成

本石町十軒店
英平吉

江戸書舗馬喰町一丁目
西村與八